

夏季福音特別集会（2）（浅間高原）

愛なくば

――コリント前書第13章1～3節――

1957年8月10日

小池辰雄

同胞のために祈る会 三つの峰とも一つ別な峰 愛なくば 異言・靈言・靈音・靈舌は一つ
 預言者の健全性 奥義に捉まえられる キリストの言は自らの体験の告白 幸いなるかな靈の
 貧しき者 キリストの芥種という原始力 神の側についているか、サタンの側についているか
 キリストのキの字も知らない人でも天国に 靈的な賜物に躡く 己を敵視（敵私）する無私の
 愛 集会ごとに前進 付録（参考）

【コリント前13】

1 たとい我もろもろの国人の言および御使の言を語るとも、愛なくば鳴る
 鐘や響く鐃はちの如し。2 仮令われ預言する能力あり、又すべての奥義と凡
 ての知識とに達し、また山を移すほどの大なる信仰ありとも、愛なくば数う
 るに足らず。3 たとい我わが財産をことごとく施し、又わが体を焼かるる為
 に付すとも、愛なくば我に益なし。

●同胞のために祈る会

今日の午前午後と明日の午前午後と、4回にわたりましてコリント前書13章を親しく学
 びたい。第1回は「愛なくば」という題で学ぼうと思います。少しく前に書いた詩であり
 ますが――今私たちは浅間山麓にある――この詩の中にもその気持も多少出ているので、
 読ませていただきます。「国民の歌」という、1953年6月9日作です。

一、世紀の嵐吹くなべに

さゆらぎもなき富士の峯

秋津島根の民草よ

能力を現はす期は今

思想百鍊、社会も個人も

文化に資する創造の

生業多に産み成さん。

祖国の前途に栄光あれ！

二、大地の愛を胸に秘め

噴煙絶えせぬ火山国



大和島根の国民よくにたみ

愛を生くべき期は来ぬ。とき

嗚呼、憎しみの闇の世や

愛しみの火明々とあかあか

万民の胸に点きよろずさん。とも

祖国と世界に歓喜あれ！

三、生死の絵巻、幾千年いくちとせ

湖心に宿る琵琶の月

天賦ゆたけき国民よ

天啓具現の期近し

嗚呼、苦しみの渦の世や

地の極までも身を挺し

世の末かけて祈らなん。

あまねく世界に救あれ！

私たちはここで集会をしています。また所々方々で集会や夏季集会というものはあるだろうと思います。それぞれ大いにやっていただきたい。私たちもその一端を承りまして、日本のために私たち同胞のために祈る。結局、私たちの同胞のために祈る会なのであります。決して自己陶醉の会ではありません。私達はそういった祈りの魂となって、自由自在に展開していく。その原動力を一緒にいただこうというわけです。

●三つの峰ともう一つ別な峰

パウロはコリント教会を親しく自ら神に召されて建てました。コリント教会はパウロの伝道のある意味において中心であります。彼はその当時の世界の中心であるところのローマに向かつて行く。そして、これを一つの根拠地として更に大きな展開をしたかったんでしょが、そして地の果てまでもイスパニアの西の果てまでにも行きたかったのであります。――そのことはローマ書のお終いの方に出ています――ついにローマで仆れた。殉教の死を遂げた。実際において彼の伝道の中心になっていたのはこのコリントである。しかもこのコリントはその世界の交通の要衝に当たっていて、非常に商業都市として有名な所です。また、アテネと共に文化の中心になっていたような所です。諸々の宗教がそこに混在しているような所で、非常にいろいろな雑多なものがある。いろいろなものが文化的にもまた物質的にも当時の中心であったようなコリントに、ただ一つのが欠けている。これがパウロの使命であつた。

ですから、コリント書を読むと、実に様々な問題がそこに展開されている。それにパウロはみな解明をくだしている。教会の問題にしろ、いろいろな文化の問題にしろ、コリン



ト書簡というものは、非常にその意味において、また我々の実際、人生の問題にしろ、非常に具体的ないろいろな解答の源を与えてくれている。武蔵野幕屋でもコリント書簡は既に前後書両方とも学びましたが。

これはもちろんパウロの晩年、多分〔紀元〕51、52年頃のことであろうという。コリント書簡をみますと、大きな山が三つある。コリント前書1章の18節に、

「¹⁸それ十字架の言は亡ぶる者には愚なれど、救わるる我らには神の能力なり。」(コリント前1・18)

とある。2章の2節に、

「²イエス・キリスト及びその十字架に釘けられ給いし事のほかは、汝らの中にありて何をも知るまじと心を定めたればなり。」(コリント前2・2)

「イエス・キリスト即ち十字架に釘けられ給いしままなる、つけられ給いし事実は「十字架につけられ給いし者」と言った方がいい。これはキリストのことです、のほかは我らの中にありて何をも知るまじと心を定めたり」

といって、1章から2章にかけて十字架のことが先ずはつきりと言われている。

そして、そのあとに続いて今度は2章のところに御霊のことが書かれてある。9節、

「⁹録して『神のおのれを愛する者のために備え給いし事は、眼いまだ見ず、耳いまだ聞かず、人の心いまだ思わざりし所なり』と有るが如し。¹⁰されど我らには神これを御霊によりて顯し給えり。御霊はすべての事を究め、神の深き所まで究むればなり。」(コリント前2・9～10)

そして、まあたくさんいろいろなことが書いてありますが、コリント前書15章にいきますと、復活のキリストのことが徹底的にまた書かれてある。

十字架と聖霊の事態。また聖霊の事態はそれに更に相応えて、コリント前書12章、14章でもって、この御霊のこと、様々なことが書いてある。

「十字架・聖霊そして復活」

この三つの峰がある。ところがこの三つの峰ともう一つ別な峰が聳えている。これが即ちコリント前書13章であります。

そういったような――これは構造というようなことでもないけれども――読んでいて非常に著しくぶつかるところの三つの峰と、それとまたその三つを何か捉まえたような、それに更に聳えているような13章というのがある。この13章は、12章から14章を読んでいきますと、実によくつながる。12章の終わりの方に29節、

「²⁹是みな使徒ならんや、みな預言者ならんや、みな教師ならんや、みな異能ある業を行う者ならんや。³⁰みな病を医す賜物を有てる者ならんや、みな異言を語る者ならんや、みな異言を訳く者ならんや。³¹なんじら優れたる賜物を慕え、而して我さらに善き道を示さん。」(コリント前12・29～31)



「なんじら優れたる賜物を慕え」という。そして、14章へ行きますと、
「愛を追い求めよ、また霊の賜物、ことに預言する能力を慕え。」
といて、今度は、この霊の賜物のことがまた展開されている。12章から14章にかけてその賜物のことを言つて、そして12章の終わりに、

「³¹なんじら優れたる賜物を慕え、而して我さらに善き道を示さん。」

といて、13章に入つていく。13章で愛のことを説いて、14章で、

「愛を追い求めよ、また霊の賜物、ことに預言する能力を慕え。」

と言っている。だから、この12章から実は14章にもと来ていたものに13章を、何かしらんけれども、パウロがこれを投じこんだような形であります。これは学者も気がついていっているわけです。

更に「道を示さん」というのが即ち13章です。13章をまた14章の一番始めの言葉で「愛を追い求めよ」でもつて、ちよつとそれを反響してこだましているわけです。実は12章から14章へいって、14章のあとに13章をもつてきて、そして15章に向かつていったらば、論理的な順序としてはかえつてそれの方がよさそうなんです、その論理的整列をむしろ破つてしまつて、13章というのが中に入つてきたような感じであります。それがどうしてそうなたかは、私は知りません。

パウロの書簡を見ると――パウロに限らない。預言者をみてもそうです――聖書はいわゆる頭の論理で書かれていない。それは非常にダイナミックな「生命の論理」とでもいいますか、生命の呼吸のようにして動いていく。

●愛なくば

それでは13章に入りましょう。

「たとい我もろもろの国人の言および御使の言を語るとも、愛なくば鳴る

鐘や響く鏡はちの如し。

「愛なくば」というギリシア語は、「アガペーン デメ エコー」といいまして、「愛をもし私がもたないとするならば」という言い方です。

「もし、愛を私がもたないとするならば」

と、これが3回言い換えてある。パウロは、

「たとえ我もろもろの国人の言および御使の言を語るとも」

という。「もろもろの国人の言および御使の言を語る」ということはすばらしいことです。パウロはそれをただ否定しているのではない。パウロがこの言葉を発する背景は、使徒行伝2章のペンテコステであると私は率直に思う。必ずしも註解書で私はそれを見ないけれども。

「五旬節の日となり、彼らみな一処に集い居りしに、²烈しき風の吹ききた



るときき、³にわかに天より起こりて、その坐する所の家に満ち、⁴また火の如きもの舌のように現れ、分れて各人の上にとどまる。⁴彼らみな聖霊に満され、御霊の宣べしむるままに異邦の言にて語りはじむ。』(使徒2・1)

4)

もろもろの国言葉です、この「異邦の言」^{ことくにことば}は。しかしながら、異なる言という、「異言」^{いげん}という字なんです。「グローサ」という。このところでもパウロのコリント前書13章1節でも、「もろもろの人の言」というのが直訳です。それはちょうど今の2章4節の「異邦の言」と似たような内容でありまして、他のいろいろな人の言葉、他の地方の人の言葉、結局それは他の国の人の言葉ということになります。――今の国家という概念ではありませんけれども――それはこのペンテコステの場合においては「異言」なんです。異言であると同時にそれは私たちが明らかにわかる言葉なんです。異言が、即ち普通の他の地方地方の言葉が語られているところの、非常に高次の異言の現象です。

「⁵時に敬虔なるユダヤ人ら、天下の国々より来りてエルサレムに住み居りしが、⁶この音おこりたれば群衆あつまり来り、おのおの己が国語にて使徒たちの語るを聞きて騒ぎ合ひ、

これは驚いた。

「彼らはガリラヤの人たちであるのに、どうして地中海の方々の国語を知っているのだろうか」

と言つて驚いた。

⁷かつ驚き怪しみて言う『視よ、この語る者は皆ガリラヤ人ならずや、⁸如何にして我等おのおのの生まれし国の言をきくか。⁹我等はパルテヤ人、メヂヤ人、エラム人、またメソポタミヤ、ユダヤ、カパドキヤ、ポント、アジヤ、¹⁰フルギヤ、パンフリヤ、エジプト、リビヤのクレネに近き地方などに住む者、¹¹ロマよりの旅人――ユダヤ人および改宗者――¹²クレテ人およびアラビヤ人なるに、我が国語にて彼らが神の大なる御業をかたるを聞かんとは』¹²みな驚き惑いて互に言う『これ何事ぞ』(使徒2・5～11)

そういった諸々の地中海の所々方々の地方から集まっている人たちが自分の国語を聞くような、そういった驚くべき現象がこの使徒たちにおいて起こってきた。これはその御霊の使徒たちを通して、キリストの福音がみんなにわかるように伝えられているわけです。異言をうけて、異言を解くことを同時にやっている。即的現象でやっているわけです。そういう驚くべき諸々の人の国語を語る。パウロは、

「たとい我ももろの国人の言および御使の言を語るとも」

天使の言を語るような根源的な事態になろうとも、という。



●異言・靈言・靈音・靈舌は一つ

言葉といえば、創世記のバベルの塔のところに、

「**全地は**一の言語^{ひとことば}一の音のみなりき」(創世記11・1)

という不思議なことが書いてある。なんとこの聖書というのは大胆なことを言っているかと思う。その「一つの言」の「言」という字は実は「サーファー」というヘブライ語で、これは「一つの舌」という、さつきの「グローサ」と同じ字なんです。一つの「舌」。新約で「異言」と訳されている言葉と同じ字です。一つの異言だという。一つの靈言です。靈的な言。一つの靈言であり、また一つの音。この「音」という字はむしろ「デバリーム」ということばで、「ヴォルテ」「言葉」という字です。こちらの方がむしろ「言葉」です。一種類の言葉と一種類の靈言である。靈音であつた、靈舌であつたという。一種類の靈舌と一種類の靈言であつたというわけです。即ち、語られる言葉は日本語やいろいろな沢山ありますけれども、その私たちの言葉の、みんな言葉の現象の表現はちがつても、その奥において思惟されている世界、思われて世界は、ドイツ人がこの花を花と思つても、アフリカの土人がこの花を花と思つても、私たちがこの花を花と思つても、この花という概念を思うというところの根源の語においては一つなんです。それを発するというと、日本語では「花」、英語では「フラワー」です。発する言葉はちがいますが、その現象の奥は実はある一つのものが思われている。一つのものが捉^{つか}まれている。その一つのものが捉まれている。思われているところの根源の「ツング」即ち「舌」は、靈舌は一つである。また靈言は一つである。靈舌、靈言というものは、神に造られた人々にはみな一つである。

私たちはみな同じ顔をもっている。顔の表現はちがう。みな一人ひとり、みんなちがう。どんなに似ていてもそれはちがう。みんなちがうんだけれども、それは共通に目が二つで鼻が一つでというわけです。この庭に来て私は驚いた。実に沢山のいろいろな花が咲いていて、ああ美しいなあと。即ち、花は一種でなくて様々な花があつて本当に調和をなして美しい。世界も実にいろいろな民族がいろいろな言葉を語っていて、実はそれで美しいんです。またいろんなことを考えていて、それで美しい。いろんなことを信じて、それでいいんです。それをなぜ、

「私のようにならなくてはいかん」

というようなわけで、

「みんなそれがある一つの自分〔私〕の方にもつてこよう」

というような、そういったような私^{わたくし}でもつて動いている。そこに実は「一つ」ということに大きなまちがいがある。そういった一つの在り方はとんでもない間違つた「一つ」だ。即ち、相対的な現象である私たちというものを、それを絶対化してその一つにしようというならば、それは大きな間違をする。ところが、実は諸々の戦争、世界のいろんな不調和とか、問題とか、混乱とかいうことは結局煮詰めてみると、みんなそういうことなんです。



そういう間違いをしているわけです。現象は、みな現象の様々さまさまがよろしい。「様々でもいい」ではない。様々がよろしい。様々でいい。ユニフォーム〔単一の形〕にならなくていい。様々がいい。ただし、その様々が本当にある一つの根源において一つであるかどうか、そこだけが問題。その「一つ」は絶対に私わたくしすることのできない「一つ」である。その「一つ」は私することのできない「一つ」なんだ。

「無くてならぬものはただ一つ」

と、キリストは言われた。その「無くてならぬただ一つ」から実は諸々の現象が発せられている。それになぜ気がつかないかというわけです。

「全地は一つの言、一つの音であった」

ということとは、その根源においては

「二つの言、一つの音のみなりき」

ばかりではなくて、今もまた一つの音であるのです。また将来もまた一つの音であるのです。一つであったし、一つで今あるし、また将来も一つであるべきである。

それがいろいろに現象したということは、実は神さまの世界はちょうど、コリント前書12章に書かれているように、人間のからだのいろいろな役割というものは様々でありながら、それが渾然こんぜん一つです。

「俺は目だ。おまえは鼻だが、おまえも目になれ」

なんて、目は鼻に向かって言わないというわけ。互いに相助けて一つになる。

そうしたらば、世界もすべて有無相通じてそれぞれの産物をもつて交換して、それぞれの考えをもつて――それ自体の考えというものが、イデオロギーというものが、それ自体において正しいか正しくないかをみて、それ自体を正しくもつていくようにして――互いにそれを補っていくという。

なぜ、そんな摂理が、そんな理がわからないわけではない。みんなわかっているはずなんです。わかっているはずなんだが、それがどうしても出来ないという情けないものだね、人間というのは。

そういった分かっていながら出来ないという世界。文化の世界はすばらしいいろんなことを分かせてくれるけれども、それはついに本当に花咲かない。現象を本当の意味で現象しないという世界です。

これを与えてくれるところのものはただこの聖書一巻である。だから、

「聖書に帰れ、聖書にきたれ」

というわけです。

●預言者の健全性

話はすこししましたが、仕方がない。コリント前書13章にもどります。



そういうような驚くべき異言、靈言という事態の現象、御使の言葉を語るという現象。これはパウロ自身、彼は経験しています。彼自身はその賜物をいただいている。それがあつても愛がなかったならば、それはガラガラと鳴る鐘やまた響くによはち「どら」――これはやっぱり金属的なガシャーンと鳴るやつです。水盤みたいな形をしている――どらの様なもので、どうにもならん。

² 仮令われ預言する能力あり、又すべての奥義と凡ての知識とに達し、また山を移すほどの大なる信仰ありとも、愛なくば数うるに足らず。

「奥義と知識とに達するとも、愛なくば数えるに足らず、信仰あるとも愛なくば……」と、結局これは、「愛なくば」は三つあると同じことになるわけです。

「預言する」という。これはコリント前書12章からうけていますから、異言の事態と、こんどは預言の事態。預言にもいろいろな高低、種類がありますけれども。最も高次の預言は旧約聖書の預言者たちにおける預言、また黙示録における預言です。いったい、

「旧約とは何か？ 新約とは何か？」

といったら、ある角度からみれば、これは「預言の書」といつてもいいくらいなものです。新しき約束への預言であり、古き約束への預言である。この靈言の事態はまた、発してはこの預言の事態となる。やっぱりこれは神さまの御霊によらなければ、預言というようなことは勿論なし得ないことです。

「エホバかく言い給う……」

といって預言者が言っているのは、自分の意見を、大体そうらしいから、「エホバかく言い給う」と権威づけようなんて、そんなことでは絶対にならない。まさに神の言葉です。

時々、我々の間でも非常に預言的な言葉を賜って、もの書く人の如くに書くような現象が起きることがある。それでも、この預言というのは今、新約のこの時代に於て、うっかり旧約の預言者のような角度の預言にもし入っていったならば、これは危ない。キリストぬきにして預言というようなことを考えたら危ない。とんでもない逸脱をします。

私たちは殊に無教会に育ちましたが、預言の書というものを非常に伝統的に重んずる。

「どうも無教会は預言者的である」

なんていう。それでも本当の意味においてこの旧約の預言者たちのような素晴らしい次元には、これは今、私たちの間には――次元的に言つてですよ――ひとつも達してはいない。旧約聖書の預言者たちは、なぜ彼らが健全であつたか。彼らがその預言せしめられている事態は、彼ら自身はあるいは自覚はしていない。けれども、彼らの預言の方向はすべてキリストに向かつている。このメシヤに向かつている。そして、自分は直接に神の何ものかとは絶対に思っていない。彼らは本当にキリストに向かつて預言し、本当に神の前に平伏しているところの魂です。

預言がもし、預言者がもし、靈的に昂じてしまったならば、それは必ずひっくりかえる。



イザヤ書をみても、あの高次な預言をみても、イザヤという魂は低く低く本当に神の前に平伏しています。その預言者の健全性というものは彼らの実存によって証されている。その預言者がなぜ、その預言が健全であるかは、彼らの実存が証している。実存がうわつたようなことで、いくらそれが素晴らしい預言なんていったって、そいつは危なくてしょうがない。

●奥義に捉まえられる

このパウロはここで、しかしながら、

2 仮令われ預言する能力あり、

と。パウロは実にこの「預言する能力」があるし、また14章にゆけば、ことに

「預言する能力を慕い」

なんても書いている。だから、パウロは決して預言する力をいい加減に評価しているのではない。さきほどの、

「もろもろの異言、また天使の言、預言する力」

を、みなパウロは神の御霊における事態として深く評価している。けれども、

「又すべての奥義と凡ての知識とに達し」

「すべての奥義」といえば、コリント前書2章をお開きになれば、よくわかるように。奥義の世界も、これも御霊の事態です。勿論そうです。10節、

「¹⁰されど我らには神これを御霊によりて顕し給えり。御霊はすべての事を究め、神の深き所まで究むればなり。¹¹それ人のことは己が中にある霊のほか
に誰か知る人あらん、斯くのごとく神のことは神の御霊のほか知る者なし。」

¹²我らの受けし霊は世の霊にあらず、神より出づる霊なり」(コリント前2・10
s12)

いろいろな奥義を深く受けたスエーデンボルグとかサンダーシングとかいうのは割合に近代に於て現れています。スエーデンボルグやサンダーシングのあの御霊における奥義の解明の事態。スエーデンボルグもサンダーシングもその実存が、その生活が正しくあった。即ち彼らの受けているところの事態がそれによつて健全性が証されるわけです。

「奥義」「ミステリオン」という。即ち「すべての奥義」は、実は聖書の言葉はみなこれ奥義なんです。聖書は、私たちは分かるところに思っているけれども、それは一応は分かりますよ。けれども、本当にこれが分かる、聖書が本当に読めてくるということは、私たちもこの御霊の恩寵にあずかり始めましたならば、正直、聖書のベールが段々はがれてきて、だんだん読めるようになってきた。これは本当にお互いに告白できることだと思います。けれども、

「これで私はもう聖書は分かりました」

なんてことは絶対に言えません、死にいたるまで。



私は自分で――それは言葉としてはですよ――

「真理をつかむ」

とか、

「神の言葉が分かる」

とかいうような表現はするかもしれませんが。けれども、私はこの聖書を自分をつかんだとか、私たちが知っている原始福音が一番正しいとか、そんなことはおよそ考えたことはない。

「原始福音」となぜ言うかという点、原始福音の中に私たちは自らをただ投じていくだけです。これに捉^{つか}まれていくだけです。捉^{つか}まれていくだけ、限りなく捉^{つか}まれていくだけ、限りなく投じていくだけなんです。だから、主義も主張も立場も何もありません。ただ、捉^{つか}まれていって、

「ついにキリストの像^{すがた}に化するなり」

とパウロが言ってくれたところまで行かしくられていく。いや実に引^ひつ張^はられていく。前進とは即ち引^ひつ張^はられることです。そのようにして進んでいく、進ましくられていくだけ。捉^{つか}ましくられていくだけ、投入していくだけです。そしてそれを告白していることだけなんです。間違^{まちが}っていたら、

「間違^{まちが}っていました」

と、正直に何でもこれは兜^{かぶと}がぬげる。それは自分を否定しているのではないのだから。

この奥義^{おくぎ}というのは、私たちは大いに奥義^{おくぎ}を捉^{つか}まなくてはいいかん。大いに奥義^{おくぎ}に捉^{つか}まえていなくてはいいけない。

「パウロがこう言っているから、まあ奥義^{おくぎ}はいい加減^{かへん}にしておこう」

ではない。大いに聖書の中にどしどし入^いって、奥義^{おくぎ}より奥義^{おくぎ}へと入^いって行^いってください。私なんかダメですから、皆さんは遠慮なくどしどし行^いってください。私はただちよつとお取り次ぎをしているだけの人はなしですから。

●キリストの言は自らの体験の告白

又すべての奥義^{おくぎ}と凡^{おほ}ての知識^{ちしき}とに達^たし

これは知の世界でしたね。

また山^{やま}を移^{うつ}すほどの大なる信仰^{おおい}ありとも、愛なくば数^{かず}うるに足らず。

「山^{やま}を移^{うつ}すほどの大なる信仰^{おおい}」という。キリストは、

「芥^か種^{しゅ}一粒^{ひとつぶ}ほどの信仰^{おおい}があるならば、この山^{やま}にかしこに移^{うつ}れというとも移^{うつ}る」

と。まあ神さまの子キリストでなければ、そんなことは言えない。普通の人には、

「何を大言壮語するか。とんでもないことを言う」

と思われます。



けれども、キリストは「芥種一粒ほどの信仰」というのは――新しい方もいらつしやるから申し上げますが――小さなケシ粒みたいなものですよ、芥種一粒は。

「ああ、信仰はそんなに小さくてもいいか」

と、すぐ量的に考える。なるほどその表現は量的ですよ。量的に小さい。少量だ。けれども実は、これは質的にいいですよ、「芥種一粒」という小さな点のような芥種から大きな鳥が宿るような木となつて、「鳥さえ宿る」と書いてある。

即ち、芥種一粒の中には驚くべきエネルギーが入っている、原始力が。この原始生命力がこの中にある。原始生命力がこのように大きく展開する。私たち一人びとりが「芥種一粒」となる。芥種一粒なんですよ。いや実にイエス・キリスト彼自身が「芥種一粒」であつたわけです。「芥種一粒」であつたから、彼はああ言つたわけです。

キリストの言葉は全部、告白です。彼自らの体験の告白なんです。教えているのではない。「山上の垂訓」というけれども、ただ教えているのではない。あれは

「山上の大告白」

なんです。

「ああ、キリストはこう教えている。いよいよそれをしっかり守りましょう」

なんて言う。守れやしませんよ、絶対に。山上の垂訓はモーセの十誡よりすごいんだから。モーセの律法さえ守れないのに、どうしてキリストの山上の垂訓なんてのを守れるか。キリストはしかも

「為せ!」

と仰る。イエス・キリストというのはずいぶん乱暴な人ですね。ちつとも「こうして、ああして」と説明なさらないで、断定して、しかも「為せ」と言う。

「聞きてこれを行え、行わなければ天国に入れない」

と。困ってしまうですよ。困ってしまう。ところが、この山上の垂訓が、私にとってはあの時からいわゆる垂訓でなくなつた。私は垂訓に絶望したから、仕方がないから、行きどころがないから、垂訓の中に自分を投じたんです。

「イエスさま、私はできません」

といって、キリストの中に投じた。そうしたらば、別な声が響いてきた。

「出来るよ、私がさせてやる。私の言葉の中に入つてごらん。私がさせてやる。言葉を外からながめて、しようなんてしたつて、それはダメだよ。言葉の中に入つてごらん。そうしたら、させてやるよ」

と。

●幸いなるかな霊の貧しき者

申し上げているとおり、



「幸いなるかな、霊の貧しき者、天国はその人のものなり」

という、この第一言が解けたときに、私は山上の垂訓の中に入れた。

「幸いなるかな、霊の貧しき者」

と。霊が貧しい。即ち、

「私はダメです、私は何ものでもありません」

といって、本当に自分が、ダメというならば徹底的にダメにならなくてはダメです、望みなんか無い。絶望です。絶望とは悪いようだけれども、大変いいことなんです。

この望みはみんな自分の望みだと思っている。自分の望みには絶しなければダメなんです。自分の望みには、わが望みには絶するところに、天来の天望というのがかかってくる。私は自分の望みに絶しました。善くあらうと思っても、実存を善くしようと思っても、ダメです。私はもう、御霊のこともみんなダメです。愛することもダメです。そういうように自分というものに絶望してしまつた姿が、「霊が貧しい」という姿なんです。

「霊が貧しい者は幸いである。天国はその人のものなり」

と。

「絶望したら天国はその人のものだ」

とはどういうことですか。

キリストは自分に絶望していらつしやる。

「私は何も出来ません。何も言えません」

と仰つた。そうして、神さまに投じて、キリストは父の中に入った。入つたらば、父という天国が彼の中に入ってきた。

『霊の貧しき者は幸いなり、天国はその人のものなり』とは、イエス・キリスト

自身の告白である」

と、どの註解書に書いてあるか。イエス・キリスト自身が、本当に霊が徹底的に貧しくあつた。

私たちはキリストの如く貧しくなりきれない。貧しくなりきれないから、キリストは十字架にかかったんです。私は、絶望なんていつたつて、まだ本当の絶望なんかしてませんよ、私はダメですよ。

私の本当の絶望というものを私に示してくださつたものが十字架です。即ち十字架が私に「霊の貧しさ」というものを徹底的に与えた。真の絶望を与えてくださった。そうしたらば、驚くべき復活の生命が、キリストの義が、キリストの愛が入ってくる。天国が入ってくる。キリストという義が、キリストという愛が入ってくる。

即ち、山上の垂訓の鍵がそこにある。そうしたらば、このあとの言葉が全部読めてきた。そうして、私は自分自身が出来なくても、何かしらんが、キリストがそこを歩ませてくださるようなことになってきた。私は100のうち99まで躓くかもしれない。けれども、たつた



1つ、キリストというものがその中でもって、私をなおそれでも、
「倒れても躓いても転んでも大丈夫だよ、私はおまえと行く」
と言って、私を抱き上げて進ませてくださるから、これが十字架・復活の恩寵である。絶
対恩寵である。これを拒むわけにいきなりは、これは。

●キリストの芥種という原始力

これはえらいことになりましたけれども。山を移すほどの大いなる信仰、芥種の話から、
そういうことになりましたが。

「からだね芥種の信仰があれば山は移る」

と言った。イエス・キリストの「芥種」というのは、そのような霊的な原始力そのもの。
キリストという原始力そのものは、私たちの中に宿る。そうしたらば、神の聖意に本當に
従っているときには山が移る。神さまが山を移そうと思えば、移る。その祈りが本當に聖
意と一つになっているところには現象するということなんです。

だから、

「山を移すほどの信仰があるとも」

というのは、

「そういつたような驚くべき信仰をもちなさい」

とパウロは先ず言いたい。それを水割っているのではないですよ、皆さん。異邦人の言葉
を語る驚くべきサンダーシングやスエーデンボルグのような驚くべき人に、私もさせてい
ただければ、なりたいですよ。

諸々の国語、御使の言葉を語ることはいかに結構です。預言する能力も大いに結構です。
奥義も極みまで究めようとすることは結構です。また山を移すほどの信仰もなくてはいか
ん。パウロはここで

「…とも、…とも、…とも」

と言っているけれども、それは実は非常に大事なものです。これはコリント前書12章、
14章に限らず、パウロの書簡の中にもヨハネの中にも出てきている。そして、宣教は、パ
ウロはこの御霊の力によって実証しながら、彼の宣教は言と行とが一体となつて、彼の伝
道は展開しているんです。イエス・キリスト彼自身が福音書において最もそうである。

「盲者の目は開き、聾者の耳はあき、癩病人はきよめられ、死人は甦らされ、

魂の碎けたる者は福音を聞かせられる」

と。「心の貧しき者」とはそういうことだ。本當に魂の碎けた者は福音をいただく。

「おおよそ我に躓かざる者はさいわいなり」

と。神さまの恩寵の世界は驚くべき豊かな世界である。生命が限りなく発動する世界である。
それに水を割ることはひとつもないぞと。この福音書の現象する信に対してもつと今のキ



リスト教の世界は謙虚にその中に水割らずに入って行かなければいけない。

そうすれば、何も病を癒すという現象ばかりではない。芸術の世界であろうと、事業の世界であろうと、学問の世界であろうと、何の世界であろうと、みんなそれは驚くべき力となって神さまを現象していく。文化がなぜこんなに行き詰まっているか。なぜ、たとえば、ひとつの芸術をみても、あのレンブラントとかラファエロとかダビンチとか、ああいう驚くべき芸術家が出てこないか。ベートーヴェン、バッハ、ヘンデルというような、ああいった古典音楽的な音楽が今のところにどうしても及ばない。なぜ及ばないか。彼らは本当に神の霊に化体^{かたい}されているところの芸術家であるからであります。

日本でも仏教の世界で、雪舟とか白隠和尚の芸術には、やはり普通の画家はともかかわない。技術においてかなう面があるかもしれないけれども、その生命と力と迫力においてかなわない。なぜか。彼らは、その禅宗の世界で魂がつきぬえているから、その発動するところのものが。宮本武蔵のちよつとしたデッサンでもそうでしょうが。

それは人間のいわゆる知情意というような、いわゆる人格の三様態であるところの知情意というところをもう一つ突き抜けた世界から——これが主となってカントの哲学だつて——正に信仰の世界から来ているんです。あの驚くべきカントの哲学には、私は本当に畏敬の念をもっている。これはあたまでカントは、いわゆるドイツ観念論なんて片づけられやしませんよ。本当にカントはこの信仰の世界から彼の魂は、ピューリタリズム[Puritanism、清教徒主義]のところから、ピエティスム[Pietismus、敬虔主義]から出ている。芸術の世界もまた道德の世界においても、その本当のチャンピオンはみんな上からきている。

● 神の側についているか、サタンの側についているか

そういう意味において、パウロがここでもつて、

「たとえば…、たとえば…、たとえば…」

といって、何か少しけなしているようだけれども、その内容は、いや実は大いにこれは求めてよろしい。

ペンテコステの事態で、驚くべき火の如きものが——聖霊は火ですから——火の如きものが来て、グーッと白熱してきた。そういった白熱の情や、また深い神秘の世界に入つて、霊知が発動してくるのは。聖霊の智慧の世界です、パウロが言っているのは。それからまた信仰と、それからその次にもう一つ出てましたね。

3 たとい我わが財産をことごとく施し、又わが体^{からだ}を焼かるる^{わた}為に付すとも、

愛なくば我に益なし。

ずいぶん極端なことを言っている。財産をすっかり施し、また体を焼かれるために渡すという。そういう驚くべき殉教的な行為、あるいは喜捨慈善というものがそのようになさ



れようとも、という。これは意志的行動的な世界です。非常にパウロは知情意の三つの世界の、しかも霊的に素晴らしい世界をここに展開している。知らない間に。そういった殉教の事態であっても、もし愛がなければと。どういうことでしょうかね。

コリント教会でかなり霊的な次元が高くなってまいりまして、コリント教会は霊的な賜物が相当動いていた。それでパウロが心配になってきた面がある。今の普通のキリスト教会は霊の世界がいつこうに展開しないで心配なんです、観念で。ところが、このコリント教会では御霊の事態が展開していて、今度は心配になる。どっちの心配がより困った心配かというと、御霊の世界が展開していた時の心配が深刻なんです。それはひとつの素晴らしい力を有っていますから。

力をもっているといつが悪いいたずらをする。サタンというやつは霊的なやつですから、悪鬼というやつが、サタンの手下がたくさんいる。だいいちイエスにでつくわして第一にまつ先に

「これは神の子だ」

なんてことを言ったのは悪鬼ではないですか。ある人に入ったところの悪鬼です、これはマルコ伝に書いてある。イエスに一番近い普通の村里の人たちは、イエスが神の子であることがわからないのに。善人がわからないで、悪鬼どもがイエスは神の子であることを見ぬいたではないですか。

また、サタンというやつが実に私たちをあやつって悪いことをする。私たちの魂は眠っていても覚めていても、自分自身がいくら覚めていたって、ただ自分の目覚めくらいではダメなんです。また眠っていても眠っていればダメです。要するにサタンの霊がいろいろに取り扱っている。

「神さまなんかあるものか」

なんてことを言っている連中も、ちゃんとサタンによく利用されているわけです。とにかく、世界中のどの人も例外なしにみな、霊は有^もっている。魂は有^もっている。その魂がいったい神の側についているか、サタンの側についているか。神の側についても知らない人がある。サタンの側についても知らない人がある。いろいろな現象があります。

●キリストのキの字も知らない人でも天国に

「キリスト」の「キ」の字も知らない人で天国にいくらでも行きます。また、大いに聖書は知っていても、天国に入れない人もあります。誰も、天国に誰が入っていくかを知ることができない。人は絶対にひとのことを

「あの人は天国に行くの、地獄に入るの」

と、そんなことを人間は言えない。これはただ神さまだけが心配し給う世界です。そういう極めて神の絶対な判断というものに対して人間は一指も加えるわけにいかない。また、



自分でそれを判断することもできない。

そういったわけで、霊的な事態は、知ると知らざるとにかかわらず、すべての人は実は――人間は万物の霊長なんていうけれども――みな霊的な存在なんです。私たちはすべて霊的な存在です。たとえば唯物論者でいるようでも、みなこれ霊的な存在なんです。霊的な存在であるから、いよいよ本当の神さまの霊を慕いなさい。神さまの霊と結びなさいということ。

けれども、私たちは神の霊といきなり神人合一的な結び方をしたら、これはとんでもない怪我をする。それはとんでもない間違になる。それがまた逆にサタンの手下になる。神さまと一つになっていると思っていたら、知らない間にそいつはサタンだったというようなことになる。うなことにしてしまう。

そこで、霊的なことになってきたから、大いにパウロは12章や14章でもって霊の事態を語り、またそれを勧めていながら、13章のまんなかでもって――そこにひとつの防波堤といますか留めといひますか、何だか知りませんが――13章でドカーンというものをここに置いた。14章を言う前にあぶないから。12章から14章に行くまえに危ないから。コリントの教会に危なくない本当のものを与えようと思った。

『たとえ…、たとえ…』とあるから、まあそれでは「賜物はどうでもいいや」

といって、普通のクリスチャンはこれをいい加減に取り扱う。それはいかん。

「たとえ…、たとえ…」「…の賜物があっても」

と言っているのは、パウロはみんな彼自身がこのような驚くべき賜物をいただいている彼自身の告白です。

「私はこんな素晴らしいことになりました」

と、パウロは。

「私は異邦の言葉を、また御使の言葉を語らしめられたこともある」

と、コリント後書12章にも書いてある。そして奥義と知識とに達し、山を移すほどの信仰の人です、パウロは。また殉教の死をとげることのできたパウロです。それは今、自分の体験の一種の告白です。

「それであっても、愛がなければ、愛がなければダメ」

という。この御霊の事態は、それではいっただうしたらいいのか。御霊の事態は、賜物がきますという、と、賜物によるこぶ。またパウロは、「賜物を慕う」という言葉を言っているから、この「賜物を慕う」という言葉に躓いてはこまる。ちょうど、

「ユダヤ人は微を求め、ギリシア人は智慧を求めている。私たちは十字架だ」とパウロが言った。



●霊的な賜物に躓く

私はこの次の『曠野の愛』[第26号、1957年8月発行]に「言い逆らしいの徴」[1956年降誕節、東京療養所東講堂での口述録音による]という題で書いた。この徴を、現象を求める。

「聖書は実は徴の宗教だ」

と、私はそこにも書いた。神さまは――観念したつてしようがない――神さまは事実、モーセに現れた。あの柴の中で火という徴をもつてモーセを呼んだ。モーセは、

「何だろう?」

と思つて行つた。モーセは霊火という徴に誘われて行つた。そうして、在つたものは――霊火が何であつたかではない――その霊火という徴において現れてきたところの神のみ声であつた。神のご臨在であつた。

「我なんじと共にあり」

ということだつた。「この霊火を大事にとつておけ」なんて、そんなことを神さまは仰らない。徴は、徴において現れながら、徴の奥の世界に入るために徴をあらわす。私たちはとにかく五感の――人間は五感的具体的な存在ですから――現象してこなければわからないですよ。言葉だつてこれは現象ですからね。お互いに言葉という徴、現象を通してお互に通ずる。

ところが、神さまの徴が素晴らしいものだから、この徴を求めているから、徴に躓くから、これは御利益ごりやくになる。御利益宗教になつたら――そこの宗教はみんな御利益的徴の宗教です、振興宗教なんてものはそれが多――いわゆる病が癒えてみたり、いわゆる事業が繁栄してみたり、そういった徴でもつてみんなとられる。

皆さんは、キリストをいただければ、力を得てきています。けれども、病が癒されるために、福音なんか信じているのではない。

そういった徴に躓いている。ところが今度は、霊的な賜物に躓く。霊的な賜物に躓くような事態になつたから、パウロが、

「それではダメだ、愛がなければ」

と。即ちもうひとついうと、

「霊的な賜物を私わたくししてはいけない」

ということ。霊的な賜物は――パウロが「慕え」と言つたから――慕つていいですよ。けれども、それは賜物において、賜物を徴として、賜物を突き抜けて、何を慕うのか。キリストを慕う。賜物それ自身を目的としてはダメです。徴それ自身を目的としてはダメ。また、それをいただいたからといって、賜物を私したらダメです。

私たちがどうなりましても、どのような現象にぶつかりましても、うろたえないことになるということは、またおごらないということになることは、この賜物を私しないということ。御霊の事態、霊の事態を私しないということが極めて大事です。



だから、いつまでたっても、真理は一つ。

「霊の貧しき者は幸いなり。天国はその人のものなり」

と。徹底的に、

「霊的に素晴らしくなればなるほど、私はなにものでもありません」

と、霊の貧しき者となっていなかったならば「ダメです」。

サタンは霊を私している。サタンは霊を私して勝手にこれを使って、神さまの反対なことをやっているわけです。キリストの反対なことをやっている。霊を私して「我は」というサタンの霊が、これがいかん。

●己を敵視(敵私)する無私の愛

パウロが

「たとえ…〔賜物があっても〕」

という素晴らしい事態が、素晴らしければ素晴らしいほど、その素晴らしさは神さまのものであり、そして、それは神の法則として展開していくものであり、神の聖意として現じて行くものとして、私たちが慎んでこれに対していかなかったならば、それだったならば「ダメだ」と。それをパウロは別な言葉で、

「もし愛なくば……」

と言ったとみてよいとおもう。

「たとえば何々のことがあっても、もしそれを私したらば……」

といつてもいい。

「そんなものを私したならば、ダメだ、ダメだ」

といつてもいい。愛というものは、私しない世界なのですから。だから、「愛なくば」ということはもうひとつその前段階として今、私が申し上げるのは即ち、「私するならば」ということです。

「おのれの命をも憎まずば、わが弟子となることはできない。福音の世界、天

国の世界に入っていくことはできない。永遠の生命は得られない」

とキリストが言われたのは即ち、無私です。いや実に無私どころでない。キリストは、

「おのれをも憎まずば」

といって、おのれを敵視する——敵私、敵の私——この敵私するわけです。己を敵視(敵私)

する。己というものに

「ナイン、否^{いな}!」

と言う。自分というものを否として、

「神さまを然^{しか}り」

と言うのが、神への愛である。「愛なくば」という言葉のもうひとつ奥は、



「それらのものを私するならば」

ということ。「愛なくば」はギリシア語では、

「もし愛をもたなければ」

という。愛というもので自分が愛していかなければ。即ち、自分というものが愛となる。自分「私」というものが愛と置き換えられるんですから、「愛をもつ」とは。自分というものが愛というものに置き換えられるわけです。自分「私」というものが在るかぎり、愛は入ってこない。

だから、「私が愛をもつ」という言葉は矛盾した言葉ですね。けれども、私たちはただ空想のものではないですから――私は私ですよ、どうしたって私は私なんですけれども――これがいわる私でないということ。即ち、無私の愛。愛が即ちそこにおいて本当に私を占領して、愛というものが私の主権をにぎらなくては。愛というものが自分の主権をにぎらなくては。

「私」の主語は愛であります。主語は愛である。「私」が主語ではない。

「私は愛をもつ」

ではない。だから、パウロのこの言葉をもうひとつ言えば、

「私は愛にもたれなければ」

と訳したらいい。そういうギリシア語ではないですよ、アガペーは4格だから。「私が愛をもたなければ」なんですけれども、

「愛が、アガペーが私をもたなければ」

と、逆に三人称「主語が愛という三人称」で言ってしまう。

「愛が私をもたなければ。私は愛にもたれなければ」

ということなんです。「私が愛をもたなければ」というのは。

即ち、そうなってきたらば、今言ったところの諸々の賜物は私されない。これらのものを私しなければ、それはみんな結構なんだ。けれども、

「どんなにそれらのものがあっても、もし愛というものが私というものの中心にな

っていないければ、私が霊的なことをやってみたら、ダメだ」

と。御霊の事態が私を捉^{つか}まえている。だから、霊は御霊の賜物をもつところの、どこまでもこれは神さまのものである。「ガーベ」「賜物」は即ち「アフガーベ」「課題」であるということなんです。「ガーベ」という賜物が即ち神さまから預かった課題であるという。それなら、「愛なくば」ということの気持がはつきりわかる。

●集会ごとに進

私はこの今の時間においては、その「愛なくば」でおしまいになります。その愛が何であるかは、その次に、午後は第4節から7節までいたします。明日は8節から13節まで2回



にわたって皆さんと、明日の午後に本当にそこまで——「説明」ではないですよ、「わかる」ではないですよ——本当にそこに化体かたいしたいと思う。

集会は集会ごとに前進であります。いいですか、皆さん、繰り返してはいけません。集会は集会ごとに前進で、私たちはこのキリストの愛によって前進せしめられていく。何とうれしいだろう。自分が前進するのではない。私たちはその中に入れられていく。常に成長してやまない。私はもう50過ぎたから「53歳」、肉体はちよつと成長するわけにいかないけれども私の魂と、それからキリストの私の中に宿り給うところの体は、霊体は、成長また成長していく。本当にそれは成長していく。けれどもこれは私のものではない。神さまのものです。皆さん、本当にそれでもつて、パウロのこのコリント前書13章の始めの3節の、

「たとえ…、たとえ…〔…であつても〕」

というけれども、パウロが言っているところのこの「たとえ…、たとえ…」の中の事態を、今の普通の教会や無教会のように、

「パウロがこう言っているから〔どうでもいい〕」

といって、いい加減に読んではいかん。パウロはそこを本当に突破してきた人間ですから。しかし、パウロは、その突破はいつたい何によったかは、またお話しします。

けれども、今、第1回で私は相当、課題を残して今おわります。そして、このあと進んでいきましょう。楽しいです。これで第1回はおしまい。

付録(参考)

この聖書講筵「愛なくば」のテキストは、1957年の夏期特別集会(小諸)の第2回講筵の録音から文字化したものである。この夏期特集の5回の講筵は次のとおり。

1957年8月9日午後	第1回集会	『絶対恩寵』	詩篇第103篇
1957年8月10日午前	第2回集会	『愛なくば』	コリント前書13・1～3
1957年8月10日午後	第3回集会	『愛の本質』	コリント前書13・4～7
1957年8月11日午前	第4回集会	『愛の知』	コリント前書13・8～12
1957年8月11日午後	第5回集会	『最大なるもの』	コリント前書13・13

次に「曠愛新書」第1号『福音の心臓』の「はしがき」を記す。

はしがき

遷暦を迎えたこの甲辰の年(1964年)、人生の後篇に突入したので、更新の心やみがたく、ここに『曠愛新書』を発行することにした。

キリストの福音を中心とした内容であるが、聖書の解説にせよ、神学的論説にせよ、随筆や詩歌にせよ、私の念願は、あたまでつくりあげたようなものではなく、キリスト教という歴史的名称の「教」という語がもつような教訓や説教めいたひびきでもなく、



むしろ日本古来の茶道、華道という名称のよつに、キリスト道というひびきのもの
ありたい。

キリスト自身が

「人を生かすものは霊であつて、私が話した言は霊であり、生命である」（ヨ
ハネ6・63）

と言ひ、

「私は道であり、真理であり、生命である」（ヨハネ14・6）

と言いなさつたように、身につける霊的な生命的な真理をこそ道といふのである。

本書、第一号の主題は『福音の心臓』であつて、コリント人への第一の手紙（第一コ
リント）第13章の私訳と解説である。これは1957年8月9日から11日の3日間、浅
間山麓小諸において開催した第5回夏季福音特別集会で語つた講義の録音を基として
書いたものである。なるべく講義の生まの言葉を生かしておいた。愛は何といつても
キリスト道の心臓的なものであるから、「福音の心臓」と題したわけである。

次の「霊燈万里」なる詩は、関東大震災の三十周年にあたる1953年9月1日の夜、
冥想しつつ、祈りつつ、一気呵成にものしたものである。これバプリント版で発表は
したが、この夏の大震災、大水害、大火災を身近かに思つてここに編入し、この詩と
共に新しい祈りを捧げる。

第三の「実存と詩想」は、『曠野の愛』誌第三号（1951年3月、プリント版）の
主題「霊的実存」を改題した神学的性格の論説である。ルッターにとって神学と音楽
が姉妹であつたように、私にとつても神学と詩歌とは姉妹である。それは共に霊的人
格性というたましいの場においていとなまれる学的思索であり、詩的創作でありたい
からである。

願わくはこの新書が、福音の世界における熱泉の一つとして、人生の旅人の心をあ
たため得んことを。

1964年夏

小池辰雄

政美兄上の御霊前に！

原始福音の戦を戦い抜き、

キリストの幕屋の実存を貫き、

大詩篇『神の幕屋』のため

大奮闘をいたします。

1964年8月1日

天鐘

